

長良・若野田 憲法九条の会だより

No.160
2020年
6月号

事務局連絡先：林
090-6769-9809



【司会】前回からの続きをよろしく

著者：瀬瀬厚氏との対談「自衛隊加憲論とは何か」 前号からの続き

【瀬瀬】今回のコロナ問題はいつかは終息するとしても国際社会も含めて政治・経済・教育・文化を含め、あらゆる領域にある種のパラダイム（常識）転換は必至です。これまで戦後、冷戦後、ベトナム戦争後、対テロ戦後、等、幾つかの「後」（ポスト）を見てきましたが、これに加えて「ポスト・コロナ」の世界と、どう向き合うかがこれから大きな問題となってきます。私の造語ですが「天為」という人間の知恵と技術では完全にはカバー不能な相手と対することを突き付けられた人類が紡ぎ出す解答は何になるのでしょうか。一国主義に閉じ籠って自国至上主義を貫徹しようとするのか？それも国際協調体制から国際共同体の構築によって共同対処の体制を築き上げていくのか？勿論！後者の選択が合理的です。そうなる安全保障も必然的に共同安全保障体制の構築から平和共同体構築への展望がぐっと現実味を増してくるようになります。その覚悟と展望を今後十分に議論すべき段階に入りつつあると思います。

【司会】そうすると国家という国際社会の単位が無効性が課題となってきますね。人類や民族は国家という縛りのなかで「安全」とか「生命」「健康」を保守してきた訳で「家なくして生きられない」なんてどこか強迫観念を抱いて生きてきましたね。【瀬瀬】そうした脅迫観念を国家の権力者たちは、上手く使ってきたのです。これまで一貫して「与えられた平和」「与えられた安全」「与えられた生命・健康・生活」に甘んじてきた訳です。そういう国の呪縛から一度解放されて、それこそ全地球的な観点から自らの存在の在り方を問い直してみることが訪れていると思いたいですね。

【司会】なるほど、それが「パラダイムの転換」という事かな。今の話を含めて、それでも国防力の強さを主張する中学生の寄稿などを含めて、どんな風に説明し思考の転換を図るのか、その辺のところにも触れて欲しいです。「大人」としての回答なら、何よりも人間の倫理や感性、人間とは何か、と言った少し根源的なところから説論することが求められるのではないのでしょうか。自衛隊であれ軍隊であれ、武力行使という、人権の最大の加害者となり得る国家が暴力を公的権力の名で独占していることへの疑問は、当然課題として問い返してもよいのではないのか？そして暴力行使（戦争発動）が如何なる成果を歴史の中で果たしてきたのかも、事例として織り交ぜ

て、もう少し説明してほしいです。【瀬瀬】思い付くまま、よく知られた事例から入ります。かつて、ある小学生が大人たちに向かつて、「どうして人を殺してはいけないんですか」と尋ねたら、大人たちは、困惑しながらも「そりゃ、殺人罪という法律があつてね……」などと法治国家の国民としての自覚から説明を始め：この国家がもつ法律や制度、社会の在り方等々：でも、小学生には、そんな法律や制度など、大人達が作り出したものに関心も向かなければ、知ろうともしません。結局、みな黙り込んでしまひ……そこで、ある人が「魂に悪いから」と言いました。人として殺人したことに悔いやトラウマ、あるいは逆に恐れ、震え、苦悶する人間の正常な心に良くないからと。人の物を掠め取つて、だれにも見つからなければその場は良いかもしれないが、一人となった時やはり、どうも落ち着かない。何時かばれるのではないかと恐怖と戦わなければならぬ。戦争が起きて、殺し殺され、傷つけあう関係が生まれることに、同じように恐れや震えが起きるのが人間の感性でしょう。人を殺めておいて、気持ち良い訳ない。真つ当な人間としての良心や感性を持つていけば、そうした良心や感性の問題を入り口にしないと、のっけから法律やら制度やらを持ち出して「だから自衛隊はね」「だから戦争はね」では小学生や中学生はついていけないのではないかな。

【司会】人を殺めるのは人間にとつて最大の犯罪だけど、その意味において人間を組織的国家的なレベルで殺める行為が戦争という名の暴力ということだね。戦争は国家を表向き発展させるかも知れないが、勝敗に関係なく人間の存在を否定する反人間的・非人間的な行為だと生徒に寄り添う講義とはそういうことだね。

【瀬瀬】さて、中学生の寄稿文には、戦争という暴力が生み出す人間の感性に反する行為であることを全く自覚できない、文字だけの世界に埋没してしまつている、何か悲しいほどの非感性というか、それが漂つている。そういう言辞を口にし、投稿までして意気軒高となっているかもしれない貧困なる精神を育んでしまつた教育現場、家庭環境、日本政治、メディアの罪はとても重いと感じます。一方通行の深まりよのない言辞のなかに、暗澹たる思いが募りますね。それはそれとして、その回答も、これまたステロタイプ（紋切型のものの方）でトートロジー（同義語の反復）の世界に迷い込んでしまつて上手くありません。【第一】に、それは軍隊にならない自衛隊なら良いのか。いわゆる「専守防衛」に徹している自衛隊なら良いのか。法的には自衛隊は既に名前限定されず強大な軍隊です。憲法に明記されなくとも、既に軍隊です。それを後追いし、よりクリアに担保するものが自衛隊明記論です。だから、自衛隊と明記しないと軍隊になつてしまう式の説明は限界を感じます。【第二】に、「大人」としての回答なら、何よりも人間の倫理や感性、人間とは何か、（※裏面へ続く）

(※表面からの続き)

と言った少し根源的な所から説論することが求められるのではないか。それで、少し私の体験談を紹介したのですが、自衛隊であれ、軍隊であれ、武力行使という人権の最大の加害者となり得る国家が暴力を公的権力の名で独占していることへの疑問は当然課題として問い返してもよいのではないのか。そして暴力行使（戦争発動）が如何なる成果を歴史のなかで果たして来たのかも、事例として織り交ぜてよいと思う。この寄稿への回答を他の中学生、高校生、大学生が読んで合点する者がどれだけいるのだろうか。それは憲法9条を守っていれば平和は保持できると考える、超楽天的な思想行動に通じます。これは「9条ぶら下がり論」と言う、すでに言い古された言葉ですけど。

【司会】「憲法9条ぶら下がり論」とは厳しい表現だね。確かに護憲スローガンのなかで、憲法を守ることが目的化して、どう守るのか、何故守るのかを考えよう。

【総論】戦争は、差別、貧困、抑圧など不可視の暴力に対して、可視の暴力です。ガルトリングの構造的暴力論です。私たちの身近にあるドメスティックバイオレンス、セクハラ、パワハラ、虐めも不可視の暴力です。戦争も差別なども、同じ暴力です。その暴力が存在し続けるのは、権力者が国家に巣くう中で保守のための行為となります。差別構造が近代国家を成り立たせる基本原理なのです。(対談終了)

コロナ肺炎感染の不安と政治腐敗におののく 国民の命と暮らしを守っていくために 私たちは 不要・不急の「防衛(軍事)費」を削り コロナ対策に回してくれる政治に！ 変えていかなくてはなりません！

2020年度の日本の防衛費予算は 5兆3222億円
8年連続で増大し続け、今年度は過去最高額になっています

このうち「一般物件費」は約1兆円！

1兆円があれば ≡ 集中治療室のベッドを 15,000 床整備し
人工呼吸器を2万台そろえ、さらに、
看護師7万人と医師1万人の給与をまかなうことができる

概算要求で出されている軍備関係は

護衛艦「いずも」の空母改修経費 31億円
ステルス戦闘機F35Bの6機購入費用846億円
:合計877億円

≡ 全国にPCR 検査センターを
130カ所以上設置できる。

「イージス・アショア」関連経費122億円

≡ 高齢者ケア・ヘルパーを
4,000人増員できる。

※ 予算額数値は防衛省「令和2年度概算要求の概要報告書」より引用
※ 医療費への換算は厚生労働省や東京保険医協会資料を参考にしました

つばやき広場

今、地球を思わぬ敵が襲っている。圧倒的な軍事力を誇るアメリカへも容赦なしだ。核兵器など何の力もない。いくら自衛隊が最新兵器を備えていても、この敵から国民を守ってくれない。おまけに敵は、相手が誰であろうがいつさい忖度をしない。今までも牛や鳥、豚が犠牲になってきた。今度人間だ。こういう時こそ、国民の命や暮らしを守ってくれるのは何なのかはつきりしてくる。そして一番苦境に立たされるのは弱者だ。職や住まいを失い明日がみえない人が増えている。こんな時、医療体制や生活支援などが手厚くされているかどうか、その国の姿がみえてくる。

科学が発達し一部の層に富が集中していても多くの人は日々生活の糧を得るために苦労している。それが感染症を封じ込めるための「自粛」という名で壊されていく。国や自治体は早急に困っている人に惜しみない支援をしてほしい。それこそがあるべき国の姿だと思う。また世界の国がお互い非難しあうのではなく、知恵と力を合わせ、このやっかいな敵に打ち克って欲しい(Y.I)